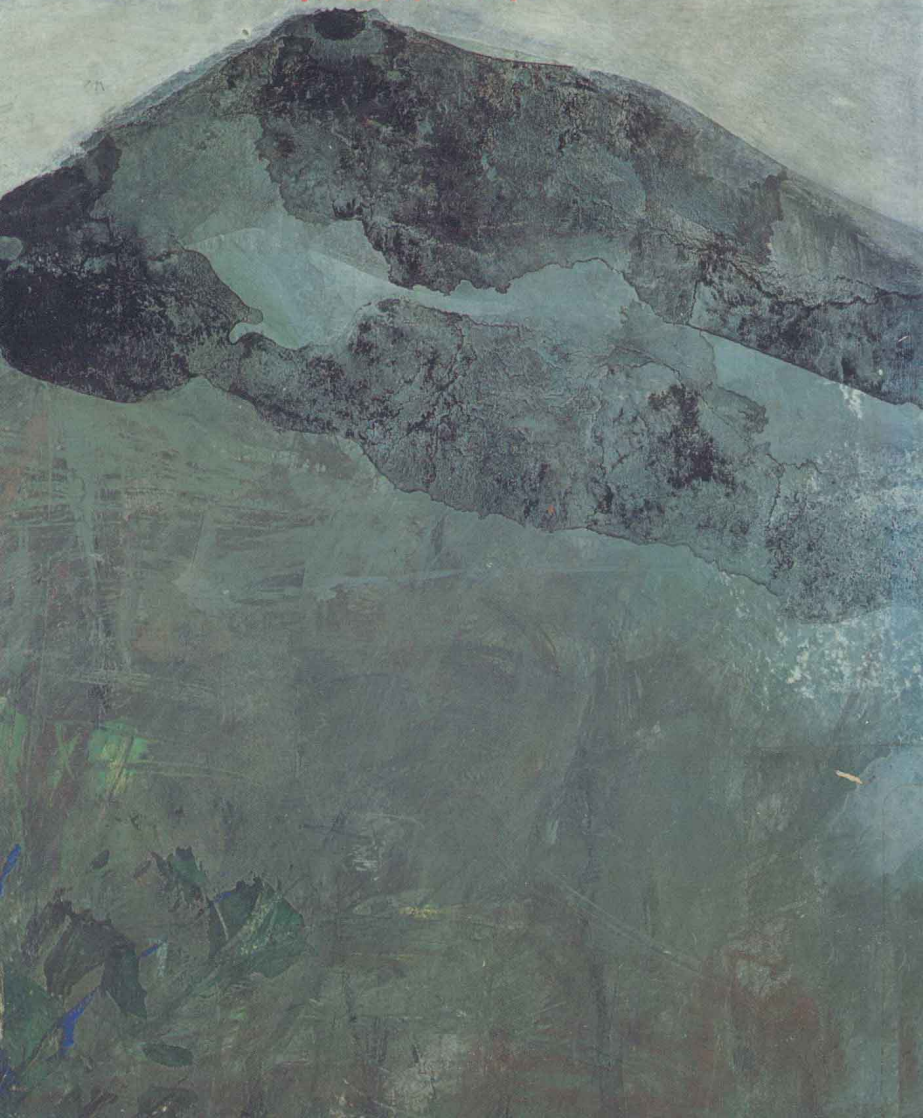


早船ちよ著＊長編小説

ちさ・女の歴史

第1部＝峠



第1部=峠



理論社刊



0393-91101-8924

© Chiyo Hayafune Printed in Japan

1966年初版 1979年新版初版

ちさ川女の歴史 第一部 峠

一九七九年十二月 第二刷

著者／早船ちよ

制作者／小宮山量平

発行者／山村光司

発行所／株式会社理論社

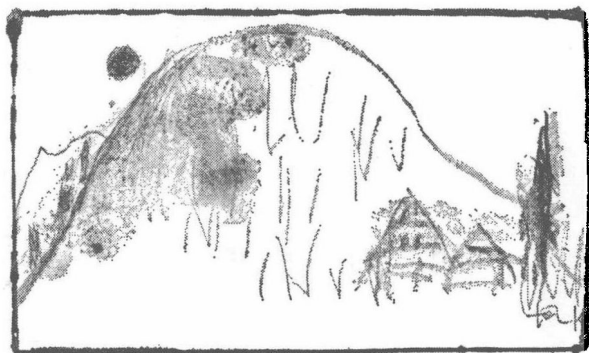
東京都新宿区若松町一〇四

電話(03)二〇三―五七九一

郵便番号 一六二

振替 東京九―九五七三六

乱丁・落丁本はお取替えいたします。



はじめに

峠に立つと

見えなかった風景が

ひらけてくる。

川ぞいの村、森、遠い町……

そこへいく ひとすじの道。

峠に立つと

見えなかった峠が

あらわれる。

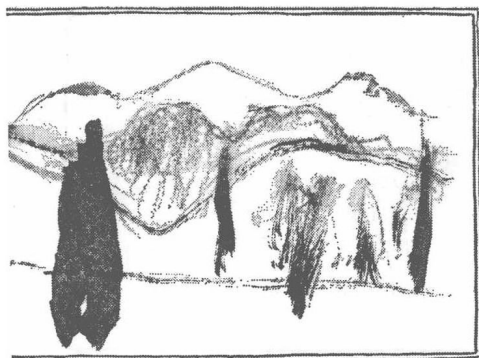
そのさきにも峠、またそのさきにも。

そして、未知の世界が

呼びかける

峠をこえておいで——と。

峠／もくじ



はじめに／1

序章 ちさのノート

ちちははの記／10

ちちははの記・つづき／18

1 青い梅の実

2 新しいのちの日々

3 地底の精気

4 蚊柱たつ町

5 その穴を穿つこと深くして

6 白壁の光る家

7 生まれいづるもの

8 茶屋町「花の湯」まえ

9 筏橋

10 雪もよいのガス灯

5

25

40

60

90

96

110

130

141

150

158



*編集部より

さきに作者は『峠』『湖』『街』の三部作を、発表した。

(いずれも一九六六年)

当時ひと息いれた上で、この長編をさらに書きつく予定であったが、ここに十三年の歳月を経て、『冷たい夏』『炎群の秋』『熱い冬』が一気に書きあげられ、全六部の連作が完成した。この機会に、連作の総括題名を『ちさ・女の歴史』としておくことにした。

序章 ちさのノート

——戦争は、十年にいちど。かならず、やってくるもんよ。

十二歳の、ちさの目のまえが、かげった。ぼたっ！ と、重たい肩掛がおちてきて、頭からかぶさる気がした。

——そうって、きまっとるさ……へ、へへへ。戦争ってやつはな。

低いつぶやきが、囲炉裡いりばたから、中の間をへだてて奥の仏間のちさへ、はっきり、ききとれた。

——そうって。もう、ええかげん、あいつは、やってくる……。

誰もいないと思っていた囲炉裡いりばたに、父の衆之助しゆすけが黒い影のようにつぐんでいた。衆之助は、洗いい桶のなかから蓮根れんこんを取り、根気よく皮をむきながら、暗がりへ、訴えつつづけている。

（誰に、話しょござるんやろ）

ちさは、背すじがぞくんとする。仏間のこたつぶとんに、あごを埋めて、囲炉裡いりばたと、そのさきの店の間を、すかすようにしてみる。

雪は、三日まえから降りはじめた。それからずっと、小やみなく降りつづけ、けさの粉雪が、

ひるすぎると、大柄な牡丹ゆきにかわって、舞い狂っている。

日ぐれどきの暗さが、ずんと、家じゅうにかぶさり、わずかに囲炉裡^すばたへ、煤^{すす}けた天窓から、鈍い光がさしこんでいるだけだ。

——積もるぞ、こら、大雪になるぞ。明日もあさっても、降りつづけて、やまなんだら、屋根がつぶれてしまふに……。

そうだ。明日も、あさっても、雪が降りやまなかったら、三十センチしかくの明かりとりの天窓もふさがらう。雪の重みで、家のなかはますます暗く閉ざされ、いよいよ、洞穴生活になつてしまふ。

こたつからまっすぐに見る、店さきの陳列窓が、洞穴の入り口めいてそこだけ、明るい。そのガラス戸ごしに、雪は、ひとしきり調子を早めて、踊っている。「小料理・仕出し、舟ばし楼」と変体仮名まじりでかかれた軒灯は、陳列棚の上で、ぼってりした雪の山高帽子をかぶっているだろう。

この高山町は、旧幕時代の天領。陣代屋敷の古い建物ものこっている城下町で、いく重にも山やまにとりかこまれた、それじたいが標高五七三メートルの盆地にあった。こうして、いく日も、いく日も、雪にふりこめられ、雪に埋もれてしまふと、そこに、人口五万たらずの町があることさえわからなくなる。白一色に閉ざされた沈黙の無人の境になつてしまふだろう。雪国の、長いながい冬がはじまるのである。

人通りは、ときたま、あった。ばさばさと傘の雪を払うおと、木履^{ぎく}（高下駄）の雪を、石たたみへはたきつける気配がする。——それが途絶えた一瞬。底なしの谷へおちこむような、し

いんとした静けさにたちかえる。

——……そうじゃ。そうじゃったぞい。ちさの生まれた年にや、どえらい戦争がやってきた。気がかい景氣がまきおこったが、五年たつと、戦争はいつてしまった。あれから、はや七年。

——七年か。もう、不景氣も長いこっちゃ。そろそろ、でかい戦争が、はじまってもええころじゃ。おう！ 戦争さえくりや、景氣もぶりかえして、金まわりも好うならずじ。

*

「ちさよ！」

白いかっぱう着の母のはるが、せかせかと、店の料理場から——囲炉裡ばた、中の間と小走りにつつきつて、奥の仏間へ入ってきた。

「おまえ、遊んどるなら、こいつの頭でも取ってくりよ」

大きい丸盆に、田作りの山盛りにしたのを持ってきて、こたつの上においた。

「あれ、かかさま。もう年取りの支度？」

ふんと、びんつけ油が匂った。はるは、けさ、髪結へいつてきたばかりの銀杏返しに、ちょっと手をふれてみながら、娘の目を、まぶしげに見かえす。

「おう、ぼつぼつ支度しとかんとな、お客様ござると、何にもできんで」

大晦日のごちそうは、毎年、しきたり通り。飴いろの田作りの佃煮。酒に漬けた数の子。人參の千切りと、鮭をちらした贈。かしわの吸物。岩魚や山女の塩焼き、思いきり厚く切ったブリのてり焼き、甘い黒豆。栗の甘露煮。

正月がくると、十三歳になる。——ちさにとって、胸のときめく楽しさだ。けれども、漠然

とした不安と怖れがある……。信用するまえにまず、いちおうは疑うこと。それをちさは、覚えはじめた。(十三歳になる……。それがどうして、喜びでなければならぬのやる?)

衆之助が、貧血性の骨ばった顔をはるに向けて、いった。

「そうゆう、めでたいときに使う魚は、頭を取らんこっちゃ」

「ああれ！ 去年はあんた。自分で取りんさったに」

「おらァ、そんなことはせん」

衆之助は、胴丸を着ぶくれ、前こごみになった姿勢のまま、蓮根の皮をむきつつづけている。

「あんなこと、言よござる。ちさ、取れ、取れ」

はるは、こともなげに笑いとばす。店の料理場へもどっていくまえに、ちらっと、鏡台をのぞき、まっ白いエプロンからのぞいてみえる黒襦子の襟もとへ手をやった。結いたての銀杏返しに、お祭り用の、だいじな珊瑚の玉が赤く光っているのを、ちさはみた。

はるの小柄な体の、身ごなしはびちびちしていて、衆之助より五つ年下の四十五歳とは思えない活気がみなぎっている。——もうあと、幾日かで、大節季の大晦日がひかえている。年取りと新年の仕出し料理の注文も、ぼつぼつやってきていた。この不景気な年の瀬をこすためには、はる夫婦が身を粉にして、倍稼いでも稼ぎ足りることがないのだ。——それに、はるは、成長ざかりの長女のちさと、次女のみつ子、その下の杉太郎の三人の子どもに、夜なべかけても、正月の晴着を縫ってやらねば……と考えている。

はるは、けさから、仕出し料理の煮付けや、材料ごしらえに、手順をつけて取りかかっているのだった。

衆之助は、庖丁を、コトリと囲炉裡の伏木へおとして、立ちはだかった。

「あほう！ くそだわけめ！ ヨコハマでも、トウキョウでも、行つて見てみよ。すべて、物にはきまりということが……」

衆之助口ぐせの冒頭がはじまった。

はるは、店と、囲炉裡の間のしきいのところでふりむき、声を大きくして、いいかえす。

「ふん、ヨコハマやつて？ あんた、ヨコハマで何してござった」

衆之助は、くどくどと、自説をくりかえして、ゆずらなかつた。はるは、かんしゃく声でいいかえしながら、手荒く、まないたを叩いている。

おき去られた盆のなかの田作りは、銀いろに光っている。ちさは、田作りの五つ六つを、てのひらにのせ、不信の目を光らせた。かつて、浅黄色の暖流にのつて、海面を黒ずませるほどの群をなして泳いでいたしなやかな姿態は、濡れた青色をして、かすかに、生臭い。

飛びだした目玉、はみだしたまま固まった黒い腸……。ちさには、それが、頬骨のつきでた父の顔にみえてきて、はっと胸をつかれた。おびたらしい生命のミイラ。悶絶そのままの干ばし。——戦争とは、このような瞬間になるまで、傷つけあうことなのだろうか。

干魚の苦悶を見ていけばいくほど、見知った誰彼を見つけた。そっくりの、笑い顔さえ、気味わるく話しかけてくる。脳脊髄膜炎で、つい先ごろ死んだ祖父の広助、チンタオで戦病死したという伯父。舟ばし楼へ、いっぱい呑みにくる客の誰彼。白粉やけた酌婦や芸妓たち。近所のひとびと。

——このなかに、わたしがまじっているだろうか。それから、滝先生や、葱俊枝も……。

田作りの山盛りをかきまわす手が、ぶうんと、生臭かった。
ちさは、正月休みの宿題の綴方を思いだした。綴方用紙を赤いかばんから出してきて、鉛筆をあるったけ、何本もけずった。

* *
ちちははの記

父について、わたしは、まるで知っておらん。その生いたちもよく知らなければ、気もちにふれることもなかった。

長女であるわたしが、そうであるばかりでなく、十三年つれそっている母も、そうらしい。おりにふれて、父が、

「そんなこといったって汝、ヨコハマではこうじゃったぞ」という。

「ヨコハマ？ ああれ、いつおいでんさった」

母が、おどろく。

「いつって？ 俺のわかいときによ」

「そんなら、トウキョウへいかはった話もきいたけど、二十ぐらいのときにか？」

「うん」

「何しに、よ？」

「何って……なんってこたアないさ」

父は、まのわるいとき、いつもそうする上目づかいで薄わらいをうかべる。わたしが大きらいな顔だ。母は、わたしに向かつて、

「父つまは若いときに、ヨコハマへ何しにいかはったんやら。——なあ、どうせ、ろくなこっちゃないぞな。云えんようなことなら」

と、あてつけていう。

父は、にやにや笑って、だまっているだけだ。

父の二十歳ごろというとき、明治三十年ごろだ。日清戦争がおえたばかり、若わかしい日本の資本主義の勃興期である。その日本の玄関口であるヨコハマのどこかで父は、砂糖のこびりついたアンペラを水につけて、それを、足でふみだすような労働をしていたこともあると、チラッとして耳にしたことがある。

父は、無口で、必要なことにも口を出すことがきらいな性だ。そのときも、それ以上、いおうとしないし、わたしもかびの生えた昔の話は、あまり聞きとうもないことだし……。

杉戸桑之助は、明治十年に、岐阜県吉城郡河合村の天生在にうまれた。ここは別天地といわれている飛驒の、日本アルプスの岳麓地帯のなかでも、またへんびな、北の県境亜寒冷地帯だ。冬季の積雪二メートルあまり、四月の雪どけまで、一年の半分ちかくは雪に埋もれている。西へ、村ざかいの一二九〇メートルの天生峠をこすと、大家族制で有名な白川村へでる。

桑之助の生家も、白川村の大家族に似た家族構成だった。祖父母と、あとつぎの夫婦、その弟妹で、おんじい、おばと呼ばれる冷飯食いの四人。あとつぎ夫婦の子が男女九人。分家して

世帯をもたしてもらえないおんじい・おばは、このあたりのしきたりの通い婚かよこんの生活をしていた。二人のおばに生まれた子どもが、五人。ほかに貰もらい子も、作男もいた。二十五人以上の家族が、どっしりした三階づくりの、わら屋根の古い棟むねに住み、おなじ釜の飯をくっていた。それでも、このあたりとしては、さして大家族でもなかったらしい。

家長である当主は、代々、水神みづかみ六兵エを名のり、このへんとしては大百姓の二町たらずを耕作し、そのほか、山を焼いたあとの焼畑に、ソバや豆をつくり、畑を拓いた。お寺さまへの届けものも、きちんきちんとやって、くらしをたてていた。

衆之助は、あとつぎの六兵エの、九人兄弟の五男にうまれた。そのころ、天生あもうざい在の百姓家では、どの家の子も、小学校さえろくに行っていない。衆之助が、となり部落の高等小学校まで通って卒業しているのは、水神家が金持ではなかったとしても、いんしゅに、ゆとりがあったのだらうか。

衆之助は、娘のちさ、みつ子、その下のまだ幼い杉太郎にまで、いつも、くりかえし、くりかえしいうのだった。

——百姓になんか、なるなよ。ひえめし食って、一生、骨おって働かならん。百姓ほど、ばかで、つまらんものはないぞ——。

天生では、米のとれる田地は少なくて、ソバ、ヒエが常食。トチの実のしぶをぬいてついたトチ餅をくい、むかし、不作の年には、顔が青くむくむ宿り木のホヤの実まで食った。

日かげの谷あいからは、やせた砂地にそだつ見事なワサビがとれた。衆之助夫婦が、高山の町へ出て、小料理・仕出し「舟ばし楼」をやるようになってからも、そのまゑに古川町で、旅

館「杉久」をやっていたときにも、香気高い、粘り気のあるワサビを、天生通いの、ボッ、カさに運んでもらっていた。

天生は、飛驒の山奥によく見かける、地蔵仏のふえていく村だった。人口は、天領のむかしから、ずっと、へりも、ふえもしない。五男坊の糸之助が、百姓をすきであつたとしても、段だん田んぼの山地には、つくる田畑は猫の額ほどもないのだった。……

* * *

一月十日すぎ。

ひる休みにはいると、すぐ、担任教師の滝耕土が、ちさの席へやってきた。

「この田作りの綴方な、ひる休みじゅうに清書しんさい」

滝は、女性的といつていい物静かな、ていねいな調子で、納得のいくよう、はなしかける。

——きょうの午後、女子校で生活綴方の研究会がある。町の各小学校の先生ばかりでなく、郡ゼンたいの国語、綴方の先生がたが参加する研究会である。その席上で、ちさの文を研究作品として出してみようと思うのだが……。

「あれ、これをみんな、ひる休みに書くんですか？」

ちさは、目をまるくした。冬休みの幾日かけて書きこんだそれは、綴方用紙に四十枚くらいの厚みになっている。

「いや、いや。ぜんぶではないさ。先生が赤エンピツでカギをつけた、ここから、ここまです——文は、そのまんまでええ。仮名づかいのまちがいを直して、文字はていねいに、はつきり

書くこと」

滝耕士は、ちさの学級を一年生のときから五年生のいままで、持ち上がりで受けもってきた。今春の四月になり、ちさが六年生になっても、やはり滝が、このクラスを受けもつだろう。

——大正初期から昭和ははじめにかけて、全国的に自由主義教育の熱が高まってきていた。飛騨地方随一の中心城市である高山町の四つの小学校でも、その影響を大きくうけていた。ちさたちの女子校では、滝耕士ら四、五人の中堅教師が、子どもの個性をのびのびと育て、才能をのばしていく自由主義教育の場に立っていた。新しい綴方教育も、その一つの試みである。

「生活綴方？」

ちさが、ききかえすのに、滝は、

「『赤い鳥』の綴方を知っとるな。ああいう行きかたと、ちがつてな。働いている生活をだいにする、しごとをするひとを、尊敬し、しごとのなかに、生きがいを見つける……そういう立場で、綴方をかいていくようにしていく、いきかたなんじゃ」

「しごと？ しごとって、どんな商売も、しごとなんですか？」

「ま、そうやな。しごとは、どんなしごとでも、だいじにされならん」

「？……」

「職業に貴賤きせんはない、どんなしごとでも、しごとをしているひと、働いているひとは、それを誇りにしてええのじゃ」

（料理屋商売もですか？）

ちさは黙った。